

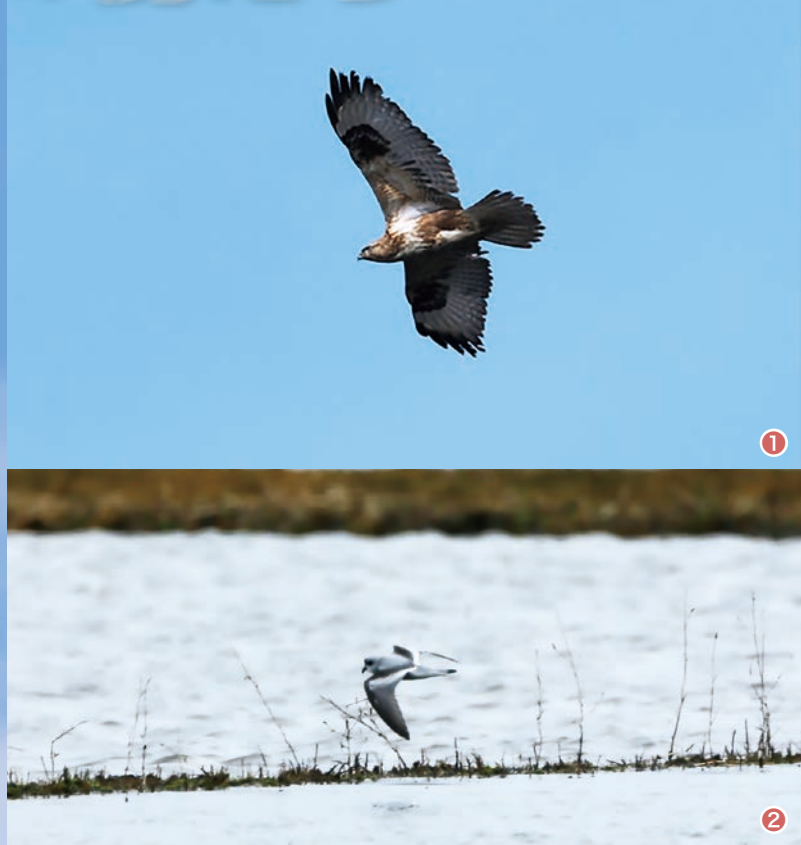
しいむじな

2023・秋

82

特集

利根川流域の鳥たち



房総のフィールド・ミュージアムとは

房総を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業（野外で展開する博物館活動）の一環です。観察会を開催したり、君津市立清和小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

写真① オオノスリ 東庄町笹川 利根川（撮影：黒田益次 2010年2月28日）
写真② ハイイロウミツバメ 成田市北須賀 印旛沼北部調整池周辺水田（撮影：横山仁志 2014年2月15日）
写真③ ナベヅル 印西市笠神（撮影：山岸克己 2020年10月27日）

利根川は、千葉県立関宿城博物館の近くで江戸川を分流し、千葉県と茨城県の県境を通り、鹿島灘に流れます。千葉県北部を流れる利根川やその周辺の環境は変化に富み、利根川水系の印旛沼や手賀沼には多様な鳥たちが数多く飛来します。ただし、夏に繁殖する種はあまり多くありません。秋から冬に飛来する種が多く、その数が多いことも、房総丘陵の鳥類の特徴（桑原 2022）と似ています。この特集では、利根川流域に生息する水辺の鳥たちを紹介します。

（桑原和之）

特集

利根川流域の鳥たち

秋に飛来する鳥たち

秋の渡りの時期、利根川やその周辺の水田などの湿地は、渡り鳥の中継地となります。ムナグロやタカブシギなどのシギ・チドリ類などの水鳥が飛来します。数が少ないコモンシギ(写真④)なども記録されています。近年、シギ・チドリ類の数が極端に減り、国際的な見地から保護対策が講じられるようになりました。

冬に見られる鳥たち

夏の間、カモ類は少なくカルガモだけが繁殖します。秋から春にかけて、冬鳥のカモやハクチョウたちが渡つてきます。水田地帯では、多くのオオハクチョウやコハクチョウが冬を越し、そこにハクガン(写真⑤)など数が少ない種が混ざることもあります。また、ハクチョウたちの越冬地では、ツルの仲間も記録されています。7羽のナベヅルが成田市方向から印旛沼北部調整池上空を横切り、印西市笠神にある白鳥の里付近を何度も巡回し、利根川上流方面に飛び去って行く様子が撮影されました(写真⑥)。ウミツバメ(写真②)やヒレアシシギ、カモメ類などの海鳥でさえ、荒れた天候の後、見かけることがあります。

多様な鳥たちが飛来する利根川流域、世界的に見てもとも数が少なく、局地的に分布するコジュリン

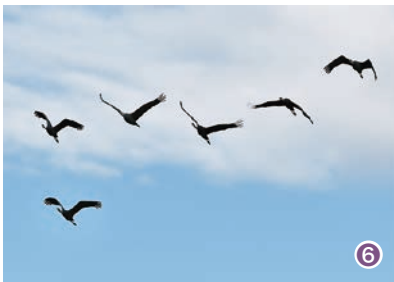
やオオセツカは、利根川水系の湿地で繁殖し、周年記録されます。川辺では小鳥が多く、オガワコマドリ(写真⑦)など稀な種が記録されます。外来種のガビチョウは房総丘陵だけではなく、利根川流域でも増えています。フクロウ類やタカ(写真⑧、⑨)、ハヤブサの仲間などの猛禽類が、小鳥が多い川辺で越冬します。秋から春、湿地で小動物を捕食するコミミズク(写真⑨)は、河川敷や埋立地で普通に越冬していましたが、激減しました。猛禽類の多くの種は個体数が減少しており、千葉県では保護上重要な野生生物として選定されています(千葉県環境生活部自然保護課 2019)。

本来の自然で生息していた多くの鳥たちは、減少しているようです。残念ながら、利根川流域で生活する種の観察記録はまとめられていませんし、詳しい生態もわかっていません。利根川流域には、フィールド・ミュージアムとして調査することが、まだまだたくさんありそうですね。(桑原和之)

引用文献

桑原和之、2022、房総丘陵の鳥類、しむじな 76: 12。

千葉県環境生活部自然保護課、2019、千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドリスト 動物編 2019年改訂版。



写真④ コモンシギ 印西市笠神 (撮影:長沼和夫 2022年4月24日)
写真⑤ ハクチョウの群れの中のハクガン幼羽4羽 香取市中洲 千葉県立中央博物館大根分館南側水田 (撮影:方波見守一 2022年12月4日)
写真⑥ ナベヅル 印西市笠神 (撮影:山岸克己 2020年10月27日)
写真⑦ オガワコマドリ 印西市発作 下手賀川 (撮影:長沼和夫 2023年4月16日)
写真⑧ ケアシノスリ 野田市木野崎 利根川左岸 (撮影:黒田益次 2005年1月18日)
写真⑨ コミミズク 野田市関宿江戸町飛地三軒屋地先 利根川右岸 (撮影:岡田光広 2017年2月1日)

コラム

房総の動植物(2)

千葉県砂浜に棲むスナガニ

海水浴などで砂浜へ出かけると、足元に直径で2〜3cmほどの穴があいていることに気づきます(写真①)。穴をじつと見つめていても、たいてい何も起きませんが、スコップで穴を掘り返してみると、奥の方からカニが飛び出してくることがあります。その穴は、スナガニが掘った巣穴なのです。

スナガニは、甲羅の幅が3cm程度の小さなカニです(写真②)。とても早く走ることができ、夜間に影のように素早く移動することから、英名で「ゴーストクラブ(幽霊ガニ)」とも呼ばれています。視力が良く、動くものに対して警戒心が強いのですが、静かに観察していると、昼間でも巣穴から出てきて活動をします。

スナガニの仲間

スナガニ属のカニは、日本国内に4種類が確認されています。スナガニは、太平洋側は北海道(室蘭市)から鹿児島県種子島まで、日本海側は山形県から九州沿岸まで生息します。ツノメガニは、太平洋側では宮城県以南、沖縄諸島、小笠原諸島まで、日本海側は新潟県以西に生息します。ナンヨウスナガニは、以前はミナミスナガニと同種とされていた種類で、太平洋側では宮城県から沖縄諸島、日本海側では兵庫県以西に生息します。最後に、ミナミス

ナガニは、大阪、和歌山、四国地方、琉球諸島、小笠原諸島から報告があります。

千葉県には、現在のところ上記のうち3種(スナガニ、ツノメガニ、ナンヨウスナガニ)の生息が確認されています。

海の生きものと地球温暖化

さて、話は変わって、二酸化炭素の排出増加に伴う地球温暖化の問題が叫ばれて久しいです。もちろん、海水温もその影響を受け世界の平均海面水温は上昇を続けており、中でも日本近海の海面水温は、平均よりも速いペースで上昇しています。海の生きものの中には、海水温や気温の上昇の影響を受け、分布が北上したり、同一地域で南方種の増加と北方種の減少が見られるなど、多くの種類において影響が明らかとなってきています。

スナガニの仲間の分布も、地球温暖化による海水温上昇の影響を受け、南方系種のツノメガニ、ナンヨウスナガニ、ミナミスナガニが日本沿岸で北方に分布を広げ、温帯性種のスナガニの生息域減少が懸念されるようになってきた、という問題が2000年代当初より活発に議論されてきました。

2017年の初秋、九十九里浜から銚子にかけて数カ所の砂浜をまわり、スナガニの仲間の分布を調査したことがありました。その時、ツノメガニとナンヨウスナガ

ニはいずれの砂浜からも複数個体ずつ捕獲できたのに対し、スナガニは非常に数が少なく、スナガニが見つからない砂浜もありました。この時、「千葉県内のスナガニ類にも、地球温暖化の影響が色濃く現れてきているのか」という懸念を抱きました。

九十九里浜のスナガニ

その後、共同研究者である当館の大木研究員とともに、九十九里浜をフィールドにスナガニの定点観察を開始しました。定点観察エリアでは、スナガニ、ツノメガニ、ナンヨウスナガニの3種を確認することができました。中でも、温帯性種であるスナガニは、九十九里浜では高密度、広範囲に生息していることが確認できたのです(写真③)。スナガニは、九十九里の砂浜生物群集における優占種でした。「南方系種の北進でスナガニの生息範囲は脅かされているのでは」という疑いは、今のところ杞憂と判明しました。

スナガニの仲間は、

巣穴から砂浜へ出てきて食事をしたり、巣穴の中を掘り返してきれいにしたり、昼間から活発に活動をしていました。定点観察を通して、スナガニの広範囲での生息が確認できただけでなく、新発見も蓄積しつつあります。

地域の自然を観察する

海水温の上昇が生きものへ与える影響は、生息する分布域の変化だけでなく、生物の生活史や種間関係の在り方の変化、さらには大気中の二酸化炭素が海水中に溶け込むことにより海水が酸性化する問題など、広い視野に立った研究を行わなければ見えてこないことが多いと思います。

一方で、地域に根ざした観察を続けることで、その地域に特有な地形、物理的な環境、捕食者や競争者の存在など、地域に固有な要因が生きものに影響を与えていることが見えてくることがあります。このように、地域のフィールドを見つめ続けることは、地域に根ざす博物館のひとつの重要な仕事であるといえるでしょう。(高山順子)



写真① 砂浜に開いた穴
写真② スナガニ(撮影:大木淳一)
写真③ 高密度に生息するスナガニ(撮影:大木淳一)

観察会報告

夏の山の昆虫

7月22～23日(土・日)、鴨川市清澄山にある東京大学千葉演習林と共催で昆虫の観察会を行いました(参加者28名)。1日目は夜のライトトラップ。飛来したシロスジカミキリなどの大型甲虫に子供達は興奮気味。2日目はふだん入れない演習林の森の中へ。午後は研究員による標本作りの実演。皆、真剣な眼差しで見つめていました。(斉藤明子)



写真① 夜のライトトラップで行われていた虫のトレード
写真② 演習林の森で昆虫採集

川の生きもの1

7月29日(土)、小糸川上流の渓谷で川の生きものの観察会を行いました(参加者31名)。大変暑い日でしたが川は涼しく、参加者は楽しみながら生きものを探していました。例年よりも水量が少ない状態でしたが、アオダイショウ、サワガニ、ホトケドジョウ、ウグイなどを観察できました。

(千葉友樹)



写真① アオダイショウにさわる参加者とヘビ使いの栗田研究員
写真② 生きもの探索中

連載

小櫃川流域の生きもの

ウグイス

～市街地の夏にホーホケキョ～

7月下旬の朝、「ホーホケキョ、ケキョ、ケキョ」と近所の家の庭から聞こえてきた。家人が「ウグイスの鳴き声ね。今時、珍しいわ。この鳥は春に鳴くのではないの?」と首をかしげた。かつて、友人が、「ウグイスは春～夏にかけて山地で繁殖し、秋に低地や暖地に移動して越冬し、山地に戻る前に低地でさえずるので、春告げ鳥と言う」と話していたので、夏でも市街地で鳴くとは?と驚いた。

ところが、千葉県自然誌本編6巻には、「県南部の清澄山や高宕山周辺、大福山周辺など森林の多い地域を除いては、1970年中ごろまでは冬季移動してくるものが主であった。その後徐々に繁殖をするものが増え、現在では市街地のなかの小面積の樹林でも、年間を通し観察されるようになった」とある。言われてみれば、流域では、河口近くのアシ原や海岸沿いの野球場でも鳴き声が春や夏に聞かれるし、冬にはハス田や川岸のアシの茎の間を、「チャ、チャ」と鳴きながら移動し



写真① ウグイス 市街地の生垣で鳴く(木更津市 2017年3月24日)



写真② ウグイス 小櫃川河口付近のアシ原でさえずる(木更津市 2016年5月6日)

てエサを採る姿が見られる。川岸の竹藪で巣を発見することもあった。ウグイスも早々と市街地進出を成し遂げていたのか!と改めて知った。

文頭のウグイスは、6月初旬から毎日、近くの学校や近所の庭で、朝と夕方に鳴いていた。このウグイスは、ササや低木が生い茂った生息に適した環境でなわばりがつくれず、しかたなく市街地にやってきたのでは?と思った。8月上旬の猛暑の午後も盆踊りの歌声に負けずに「ホーホケキョ」と懸命に鳴いている。2か所で同時に鳴き声を聞かないので、恐らく1羽のオスがあちこちに移動して鳴いているのでは?と思う。いずれにせよ、「メスが訪れ、結婚できるといいな」と思う。

参考文献

- ・富谷健三. 2002. ウグイス. 所収: 千葉県史料研究財団編 千葉県の自然誌本編6. pp. 841-842.
- ・濱尾章二. 1997. ウグイス. 所収: 日高敏隆監修 日本動物大百科第4巻鳥類II. pp. 117.

(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

MEMO

ウグイス スズメ目ウグイス科
全長約15cm

- スズメより少し小さい。全国で繁殖するが、北海道では夏鳥。近年は平野部でも繁殖するものが増え、年間を通し観察されるようになり、晩夏までさえずりが聞かれるようになった。昆虫やクモのほか花蜜や果実も食べる。一夫多妻。ササやぶなどにササやヨシの枯れ葉で球形の巣をつくる。ホトトギスに托卵されることがある。

しいむじなの由来



房総のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

今回は鳥とカニの話題をお届けしましたが、どちらも継続的な調査を通して、分布や個体数の変化が明らかになる点は共通しています。継続的な調査の重要性を改めて感じました。

本年度も上半期が終わろうとしていますが、フィールド・ミュージアムでは、予定していた7回の観察会を実施できませんでした。下半期も観察会を予定しているのですが、ぜひ当館のウェブサイトからお申し込みください。

(千葉友樹)

編集後記